

近江学研究所主催 公開講座・近江学フォーラム会員限定講座 報告

近江学研究所

近江学研究所主催 公開講座・近江学フォーラム会員限定講座 報告

近江学研究所

Name :

Omi Multicultural Institute

Title :

2018 Report on Public Lectures Hosted by the Omi Multicultural Institute

Summary :

Each year Omi Multicultural Institute holds public lectures for the dissemination of information regarding the culture of Omi. Here I will report on lectures 143 to 157, which were held between October 2017 and December 2018.

近江学研究所では、豊かな文化資源に恵まれた近江を多角的にとらえるために、「近江学」と名付けた講座を開講しています。ここに平成29（2017）年度10月以降に開催した143回～157回までの講座概要を報告します。1～142回の講座概要は、近江学研究所で発行の文化誌「近江学」創刊号～10号に掲載しています。

平成29（2017）年は、本学附属近江学研究所が設立10周年を迎え、11月4日（土）に、本学にて三日月知事をお迎えして、岡田学長との記念対談を開催。平成30（2019）年は、本研究所所長であり日本画家西久松所長の退任記念講演を特別公開講座として開講しました。

また、毎年好評をいただいている「近江のかたちを明日につなぐ」と題した連続講座を開講。本研究所研究員が講座をコーディネートし、第一線でご活躍しているクリエイターや生産者の方々を招聘、講演や対談を企画しました。

その他、滋賀県内の歴史・景観スポットでの写生会など、多彩な企画満載の講座「近江学」を開催しました。

●第143回

近江学研究所設立10周年記念対談

『近江―未来のかたち―近江のかたちを明日につなぐ―』

日時…2017年11月4日(土) 10:50～12:20

場所…成安造形大学 聚英ホール

講師…三日月 大造氏(滋賀県知事)、岡田 修二(本学学長)

成安造形大学附属近江学研究所設立10周年記念講座として、三日月大造滋賀県知事と岡田修二本学学長との対談を開催しました。三日月知事は、本研究所の近江学フォーラム会員であり、年に数回近江学フォーラム会員限定講座を受講されるなど、近江の歴史文化に大変造詣が深い方です。まずは、画家である岡田修二学長が、琵琶湖の湖岸を対象にした作品を解説しながら、琵琶湖との出会い、作品への想いを語りました。その後、滋賀の魅力はどこにあるのか、哲学的・思想的に探る岡田学長作成の概略図に三日月知事も共感され、語りが深まっていきました。近年、地方の活力に期待される中、歴史、文化、芸術など豊かな文化遺産に恵まれる滋賀県の可能性を探る充実した時間となりました。

●第144回

近江学フォーラム会員限定講座

「丸船・丸子船―湖上交通の歴史―」

日時…2017年11月11日(土) 10:50～12:20

場所…聚英館 3階 聚英ホール

講師…杉江 進氏(大津市文化財保護課課長)

豊臣秀吉によって整備に着手された琵琶湖水運は、元禄時代までは京都と北国・東国を結ぶ大動脈として、西廻り航路の整備以後は地域交通の要として、重要な役割を果たしました。この水運になった船は、現在「丸子船」と呼ばれています。当時の史料には「丸船」とも見えます。また、小型の船として「ひらた船」も登場します。史料に現れるこれらの船の名称を手がかりにして、船の支配と船の役割を通して、湖上交通の歴史を語られました。

●第145回

近江のかたちを明日につなぐ

「近江―受け継ぐかたち―幻の銘茶、政所茶に迫る―」

日時…2017年11月19日(日) 10:50～12:20

講師…白木 駒治氏(茶農家)、山形 蓮氏(政所茶縁の会代表)

対談…石川 亮(本学助教・本研究所研究員)

「茶は比叡山麓より伝搬した」という説があります。近江を代表する朝宮、土山、政所(まんどころ)の銘茶は静岡、京都に劣らず今日も多くの人々を潤しています。中でも「幻の銘茶」と呼ばれる政所茶は生産量が非常に少なく、谷間の限られた斜面で栽培され、その自然環境の厳しさと対峙し昔ながらの生産方法で現在も受継がれています。今日まで守られてきた政所茶

の存在について、茶農家の白木氏に語っていただき、また、政所茶の地でお茶産業の維持・復興に力を注いでいる山形氏に「茶レンジャー」や「地域おこし協力隊」から展開された持続の在り方について語っていただきました。水出し茶の試飲もあり、味覚からも政所茶を知る機会となりました。

●第146回

近江学フォーラム会員限定講座

「街道の土産物リレー講座（赤玉神教丸、近江の団子と餅、かにが坂館）」

日時…2017年12月16日（土） 10:50～12:20

場所…聚英館 3階 聚英ホール

講師…小寄 善通（本学教授、本研究所研究員）、吉村 俊昭（本

学教授、本研究所研究員）、加藤 賢治（本学准教授、本

研究所副所長）

文化誌「近江学」第9号で取り上げた、街道の食。それぞれ記事を執筆した3名の研究員がリレー形式で解説しました。滋賀県木之本町にある鳥居本宿の妙薬として有名な「赤玉神教丸」については小寄研究員が、浮世絵をもとに解説しました。「近江の団子と餅」は、吉村研究員が、唐崎のみたらし団子、草津穴村のくしだんごなど、往来のある街道の土産物としての団子と餅の存在について解説しました。また、加藤研究員は、土山宿に伝説として伝わる「かにが坂館」を解説しました。美術や

民俗などそれぞれ専門の視点で研究員が分析し、背景にあるものも含めその魅力を語る講座となりました。

●第147回

特別公開講座「杜と地層の風景を描く―近江と西日本―」

日時…2018年4月21日（土） 10:50～12:20

場所…聚英館 3階 聚英ホール

講師…西久松 吉雄（本学名誉教授、本研究所 所長）

18年度の特別公開講座として、2018年3月に成安造形大を退任され、4月から名誉教授となりました日本画家西久松吉雄本研究所所長の講演を行いました。西久松所長が、日常風景の中で出会い、また発見した非日常的な風景のかたちを象徴的に取り出した杜や古墳のある風景、日本列島の誕生と自然豊かな地形から生まれた日本の風土とその思想、そして地のかたちに即した生活空間のある里や町並みなどの風情を作品に込めてきた足跡をたどられました。80枚にも及ぶこれまでの作品の変遷をたどりながら、所長が地層や風景をどのように理解し作品につなげてきたのか、その制作の背景が語られました。

●第148回

「淡海の夢2018 坂本・石垣と里坊の町写生会」

日時…2018年5月26日（土） 9:30～17:30

場所…大津市坂本周辺

講師…永江 弘之（本学教授 本研究所研究員）、待井 健一（本学非常勤講師）

琵琶湖を中心とした棚田・里山、湖国の風景は今、次世代に引き継ぎたい美しく貴重な日本の原風景として広く注目されています。「淡海の夢」は、年2回の写生会と公募風景展を通して、近江の素晴らしさを体感し固有の価値を再発見する講座です。本学イラストレーション領域で風景イラストを専門とする永江研究員が、風景写生のコツをレクチャーし、講評会を実施しました。

今回は、大津市坂本にて、開催しました。曇り空の過ごしやすい写生日和となりました。集合は、最澄が生まれたお寺である生源寺境内。永江研究員より坂本の写生ポイント解説があった後、滋賀院門跡前や、慈眼堂付近、日吉大社前など、思い思いの場所での写生を行いました。講評会は、生源寺境内にある別当大師堂にて行いました。一人一人の作品について、講師よりの確なアドバイスがあり、みなさん熱心に耳を傾けられていました。

●第149回

近江学フォーラム会員限定講座

「ユネスコ世界の記憶」登録記念 特別講座「朝鮮通信使と雨森芳洲」

日時…2018年6月23日（土） 10:50～12:20

場所…成安造形大学 聚英ホール
講師…木村 至宏（本学研究所顧問）

18年度の会員限定講座第1回目は、2017年に「朝鮮通信使に関する記録」がユネスコの世界記憶遺産に登録されたことを記念して、特別講座として開講しました。

かつて日本と朝鮮国とは友好な外交関係にあり、朝鮮国から派遣された使節は、両国の平和と善隣友好の象徴として「朝鮮通信使」と呼ばれていました。豊臣秀吉の朝鮮出兵によって一時国交は断絶しましたが、徳川家康によって回復し、江戸時代には12回に及ぶ使節団が訪日し善隣友好を重ねました。そのうち2回は、長浜市高月町出身の雨森芳洲が尽力し功績を残しています。芳洲は対馬藩儒として迎えられ、現地の教育と外交等にわたって大きな足跡を残しました。講座では、木村至宏顧問が雨森芳洲の人物像を、朝鮮通信使の外交から検証しました。

●第150回

近江のかたちを明日につなぐ

「近江」記憶と記録のかたち―8ミリフィルムからみる近江の暮らし―

日時…2018年6月30日（土） 10:50～12:20

場所…成安造形大学 聚英ホール

講師…おうみ映像ラボ（長岡 野亜氏、大原 歩、大藤 寛子氏、藤野 ひろ美氏）

ゲスト・吉岡 博行氏(映像技師・株式会社吉岡映像代表取締役)
滋賀県内のくらしや文化を記録する映像の発掘・発信をしている「おうみ映像ラボ」。映像を通して、地域に引き継がれた技術や知恵・共同体の姿に「共感する場」をつくることを目的に活動されています。今回の講座では「8ミリフィルム発掘プロジェクト」の中で提供された滋賀県各地(主に草津・彦根・能登川等)のフィルムを映像技師の吉岡氏にお話しを伺いながら映写機やプロジェクターで上映しました。地域における映像アーカイブの重要性和ネットワークの可能性が語られました。

●第151回

近江学フォーラム会員限定講座

「琵琶湖と人のかかわり」

日時…2018年7月14日(土) 10:50~12:20

場所…成安造形大学 聚英ホール

講師…仁連 孝昭(本学客員教授)

18年度の近江学フォーラムのテーマは「湖と生きる」としました。その会員限定講座や現地研修は、そのテーマに合わせています。今回は、本学客員教授で環境経済学が専門の仁連先生に登壇いただき、琵琶湖と環境、そして人との共生について詳しく語っていただきました。

琵琶湖再生保全法(2016)は「自然と共生する社会の実現」を謳い、滋賀県のマザーレイク21計画(2000)はその

基本理念として「琵琶湖と人との共生」を掲げています。しかし、共生を根付かせることはそれほど簡単ではありません。琵琶湖は古くからそこに暮らす人々にとつてかわりの深い湖であり、時代の変化とともにそのかわり方も変わってきました。琵琶湖と人のかかわりの変遷を振り返りながら、琵琶湖と人の共生について、今後の有り様も含めて話されました。

●第152回

「淡海の夢2018 近江八幡・八幡堀と城下町写生会」

日時…2018年9月22日(土) 9:30~17:30

場所…近江八幡市 八幡堀周辺

講師…永江 弘之(本学教授 本研究所研究員)、待井 健一(本

学非常勤講師)

今回の訪問地は近江八幡市の旧市街地です。ここは豊臣秀次が築いた八幡山城下町から発展した近江商人と水郷の町。八幡堀周辺や豪商たちの白壁の土蔵や旧家が建ち並ぶ旧市街地は、国の重要な文化的景観の第1号と重要伝統的建造物群保存地区に選定され、歴史情緒を感じる風景が魅力でした。

今回、写生会の本部として、近江八幡市が改修し、地域の活性化の拠点として活用されている町屋「旧吉田邸」(近江八幡市多賀町)をお借りしました。

日牟礼八幡神社や八幡堀りから程近く、参加者の一服する場所としても最適で、また趣のある和室での永江研究員と待井先

生による講評も和やかに行なわれました。

●第153回

近江学フォーラム会員限定講座

「里湖としての琵琶湖―水辺の村落景観と民俗文化」

日時…2018年9月29日(土) 10:50～12:20

場所…成安造形大学 聚英ホール

講師…佐野 静代 氏(同志社大学教授)

今回は、琵琶湖の内湖を「里湖^み」と定義づけ、中近世の村落史研究を続けてこられた同志社大学の佐野先生に登壇いただきました。

琵琶湖のほとりでは、漁撈^{ぎょうろう}やヨシ刈りなど、水辺の資源を利用した営みが古代から続けられてきました。これらの生業活動はいわば「人の手の加わった自然」として、里山と並ぶ「里湖」の景観を作り出してきたといえます。この「里湖」としての琵琶湖の景観史と民俗文化について、菅浦など水辺の村々を事例に取り上げ、今日的な意義も含めて語っていただきました。

●第154回

近江のかたちを明日につなぐ

「近江―暮らしのかたち―琵琶湖の生業」

日時…2018年10月27日(土) 10:50～12:20

場所…成安造形大学 聚英ホール

講師…澤村 芳幸 氏(漁師)、松井 芳之 氏(小松水産株式会社 代表取締役社長)

対談…加藤 賢治(本学准教授、本研究所研究員)

「待ちの漁法」といわれる琵琶湖独特の「エリ漁」。魚の習性を利用して、「つぼ」と呼ばれる数か所ある仕掛けに誘導し、集まってきた魚をすくい捕る漁法です。コアユ、ワカサギ、モロコ、コイ、フナ、エビなど「つぼ」に入る獲物は季節によつて異なります。実際にエリ漁を生業とする漁師さんに登壇いただき、天候にも左右されながら、自然とともに暮らすエリ漁師の1日を紹介しました。また、オイサデ漁や地引網など、かつては盛んに行われていた漁法や、現在行われている漁など豊かな琵琶湖の水産業の現況を解説。湖と生きる人の生業の昔と今を追ひ、暮らしの幸福度についても考えました。

●第155回

近江学フォーラム会員限定講座

「地形と生き物からみた琵琶湖の原風景―本来の生物多様性保全に向けて―」

日時…2018年11月3日(土) 10:50～12:20

場所…成安造形大学 聚英ホール

講師…西野 麻知子 氏(びわこ成蹊スポーツ大学特別招聘教授)

生物からみると琵琶湖には2つの顔があります。ひとつは古代湖であり大湖沼でもある琵琶湖で、代表的な湖岸景観は北湖

の広大な砂浜や岩石・礫浜です。もうひとつは湿地帯や沼地としての琵琶湖で、代表的な湖岸景観はヨシ群落であり、南湖の大部分や周辺内湖が含まれます。今回、琵琶湖の環境保全と生物多様性を研究する西野先生に登壇いただき、礫浜と湿地という2つの顔がともに大面積に広がっていたのが本来の琵琶湖であり、両方の特性を生かす形で保全を行わないと、本来の琵琶湖をとり戻すことはできないと熱く語っていただきました。

●第156回

近江のかたちを明日につなぐ

「近江へ受け継ぐかたちーびわ湖真珠のもつ潜在能力に迫るー」

日時…2018年11月10日(土) 10:50~12:20

場所…成安造形大学 聚英ホール

講師…杉山 知子氏(神保真珠商店店長)

対談…石川 亮(本学准教授、本研究所研究員)

大津市東海道沿いにお店を構える神保真珠商店は、長年琵琶湖で淡水真珠を養殖される方々との信頼関係を保ち良質な淡水真珠を発信、提供されてきました。淡水真珠を養殖し、宝飾品としてかたちになるまでには、様々な条件が整い、多くの人の手に渡ってようやくその輝きを放ちます。それは時代の波に左右されない思い、自然と向き合う姿勢と丁寧なもののづくりを継続する努力に他ありません。今回の講座では神保真珠商店の店長である杉山氏をゲストに迎え、真珠を作り出すイケチヨウガ

イの貝殻の美しさを生かした新たな展開も含めて語っていただきました。

●第157回

近江学フォーラム会員限定講座

「絵画にみる琵琶湖」

日時…2018年12月15日(土) 10:50~12:20

場所…成安造形大学 聚英ホール

講師…小寄 善通(本学教授、本研究所研究員)

琵琶湖の景観は、古く平安時代後期の国宝「源氏物語絵巻」に描かれ、その後も絵巻や屏風、障壁画、浮世絵などに描き継がれ、貴顕から庶民に至るまで親しまれてきました。日本美術史が専門の小寄研究員は、古代から近世に至るそれらの作例について、平成21年に「近江の美術ー描かれた近江」と題して講演。今回はその続編として、近世後期から近代にかけて、琵琶湖をとりまく景観がどのように描かれてきたのかを再考察され、興味深い発表となりました。



岡田学長 近江学研究所設立10周年記念対談(2017年11月4日)



三日月知事 近江学研究所設立10周年記念対談(2017年11月4日)



連続講座「8ミリフィルムからみる近江の暮らし」(2018年6月30日)



特別公開講座「杜と地層の風景を描くー近江と西日本」(2018年4月21日)



連続講座「近江～暮らしのかたち～琵琶湖の生業」(2018年10月27日)



写生会「淡海の夢2018近江八幡・八幡堀と城下町写生会」(2018年9月22日)



連続講座「近江～受け継ぐかたち～びわ湖真珠の持つ潜在能力に迫るー」(2018年11月10日)



成安造形大学附属近江学研究所紀要 第8号

発行日 平成31年3月●日

発 行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 西久松吉雄

編 集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2019

ISSN 2186-6937